

特集 強膜炎**序 論**

雑賀司珠也*

今月号では強膜炎を特集として取り上げました。ご存知のように強膜炎では、(1)原因が感染性か非感染性か、(2)炎症の主座は前部強膜か、後部強膜か、(3)眼内病変の併発の有無、などの判断が初期診療で求められると思います。非感染性強膜炎では、単独発症か、全身性の自己免疫疾患に併発したものかの考察が必要ですし、単独発症に見えても、背景疾患が後日診断されることもあり得ます。

また、臨床現場では診療所やクリニックで治療の完結が見込まれる状態の強膜炎か、あるいは入院も含めた高度な検査と複数診療科による精査が

必要な状態であるか、の判断が求められます。自己免疫疾患に併発した場合の副腎皮質ステロイド薬による治療など、背景疾患が明らかであれば、治療選択が困難ではない場合が多いように感じます。

充血や眼痛を主訴にした患者に遭遇した場合、結膜炎と強膜炎の鑑別は総合医によるプライマリーケアが求められる最近の傾向を踏まえると、眼科医だけの問題ではないかもしれません。前眼部疾患に関する眼科医から他科診療科医師への情報発信も求められるでしょう。

本特集が、皆様の日常診療のお役に立てれば特集立案者として嬉しく思います。

*Shizuya SAIKA 和歌山県立医科大学眼科学講座